

大正十二年一月三十日 種郵便物認可
平成十八年十一月一日発行 (毎月一回一日発行)
第八十四卷 第十六号

文藝春秋

団塊世代「幸福」の一千日計画

新宰相夫人特別手記 安倍昭恵

十一月号



として名指ししていたのか。調書は、あまりに人間的な、としか言いようのないドラマにあふれていた。日本であればこうした記録は、未来永劫、世に出ることはない。しかしアメリカは、東京裁判とて例外ではないとして、史料の多くを七五年に公開した。

予想外のところから白日のもとに引き出された人間ドラマが描かれるのだ。面白くないはずがない。他人と自己のエゴイズムを見つめるのが文学の仕事だとすれば、ここに描かれる人間模様は文学に近い。よって、読みやすくなる。

人間ドラマの例を二、三挙げておこう。太平洋戦争開戦時に内大臣であった木戸幸一は、自分が有罪となれば天皇も有罪となるとの覚悟で尋問に臨み、悪いのはすべて軍人だと説明すべく腹を括った。松岡洋右と広田弘毅は少し違う。結核の末期にあった松岡は尋問中、他人の責任を告発しなかった。広田も他人を陥れることなく、「何か思い出したこと、言いたいことがあれば、遠慮せずに言っていたきたい」との尋問官の問いに対しては、次のように答えていた。

へしかし、今も言った通り、自分の刑罰を軽くするために説明するのは、ご免こうむりたい。そんなことは嫌いなのですん(下巻一二二頁)

裁判から生還した人は、いくらでも自分の言葉で「歴史」を作為できる。だが松岡や広田など、死んでしまった人の再評価を可能とする史料が、検察局の遺した史料だったという事実は、人を厳粛な気持ちにさせる。

尋問中、日本側は平和を希求する「意思」はあったのだと盛んに抗弁した。対

する検察側は、問題は「意思」にあるのではなく、それに伴う「行動」だったと論駁した。政治責任の核心は意思ではなく行動にあり、とは深い真理だと思う。文明の裁きか勝者の裁きかといった二元論はどちらも他律的なものである。真理の囁きと捉えれば、腹も立つまい。

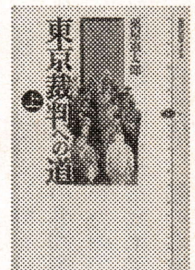
コルナイ・ヤーノシュ
盛田常夫=訳

ハンガリーが生んだ戦後最良の経済学者の人生と苦悩 コルナイ・ヤーノシュ自伝

譯者 猪木武徳

ハンガリーの人口は日本の十分の一にも満たない。しかし芸術・学問の分野で数多くの逸材を輩出している。古典的であると同時に革新的でもあった作曲家バルトーク、マルキストでありながらカフカやトーマス・マンの真価にいち早く注

目した文学理論家ルカーチ、そして社会科学の分野でも、マンハイム、ポランニ兄弟、フォン・ノイマン(経済学でも優れた業績を残した数学者)など、独特の魅力に溢れる世界的な頭脳を生み出した。



講談社
上1680円
下1575円

社会主義経済の理論家として知られたユダヤ系ハンガリー人ヤーノシュ・コルナイは、一九八〇年代半ばにその分野での業績を評価されてハーバード大学に招聘される。ちょうど社会主義体制の崩壊の予兆を感じる人が出始めた頃である。

コルナイの経済学者としての姿勢は、終始、社会科学の真理を専制と虚偽が支配する政治の世界からいかに護るかという点に向けられていた。

脱スターリン化現象で、ハンガリーが戦時社会主義体制から脱却しつつあった頃、ソ連経済学界に先んじて、社会主義経済体制を批判するいくつかの重要な論文がハンガリーで現れ始めた。それらは社会主義経済の計画管理が、企業に適切な「刺激誘因」を与えていないこと、需要と供給による相対的価格形成がなされていないことを指摘していた。論文文中に「市場」という言葉は表立って現れないが、市場による経済の制御を提唱するものであった。

若き日のコルナイが、五六年十月のハンガリー動乱直前に提出した博士学位請求論文『経済管理の過度集権化』は、初

めて本格的にソ連型システムを批判した「政治的にスキャンダラス」な作品であった。この論文により、コルナイは反革命分子として研究所から追放される。

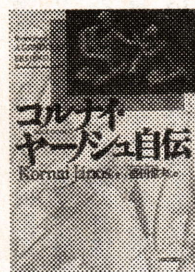
六〇年代に入り経済改革への気運は高まるものの、改革への本格的な第一歩は、一九六八年の指令伝達方式（ソ連型計画システム）の廃止まで待たねばならなかった。しかし、このハンガリー型の「新経済メカニズム」も理論どおりには作動しない。結局、一九八九年一月の国会で決議された「結社の自由」と「集会の自由」を保障する法律によって事実上の複数政党制が承認されて初めて、実質的な経済発展への道が開ける。これは、経済的自由（市場経済）と政治的自由（民主制）がいかに密接に結びついているのかを証明する事例といえよう。

本書を読むと、政治体制が経済発展だけでなく文化の創造とも深くかわっていることに気づく。二十世紀前半のハンガリー文化がその後の半世紀と比較にならないほど優れたものであったことが、政治体制と文化との関係を雄弁に物語っているからだ。

コルナイは、アメリカでの講義と研究、そしてボストンとブダペストの頻繁な往復を負担と感じはじめ、二〇〇一年、十八年間勤めたハーバードを去ることを決意する。送別会でのコルナイの挨拶の一節は心を打つ。

メモワールとエッセイを織り交ぜたようなスタイルで書かれた本書を通読すると、ヨーロッパ知識人の強靱な精神に支えられた学問的廉直さ、アメリカとヨーロッパの知的風土の違いなどが具体的に分かり興味深い。そしてそれ以上に、戦後東欧の社会科学家が経験した苦悩の深さを今更ながら思い知らされる。

権力にも富にも、そして世間にも阿る（おもん）ことのなかった学者の知的遍歴の記録として本書の歴史的価値は大きい。訳者はハンガリー経済の改革史の専門家であり、著者とも親交がある。本書はハンガリー語原書からの翻訳である。



日本評論社
4935円

著名エコノミストならぬテカガミストと呼ばれた四五歳の先生が、今度は痴漢容疑で捕まりました。

この事件を知った人のほとんどは、同じことを考えたのではないのでしょうか。この国のなかで、彼ほど「痴漢を疑われるような真似をしただけでヤバい人」はいません。最も用心すべき人のはずです。なぜでしょう。

男だから？

それとも彼は壊れていた？

週刊誌の取材によれば、彼はもともと「制服好き」として知られており、「クラブで飲んでいて酒に酔うと女の子のスカートに手を入れることなど日常茶飯事だった」（週刊文春「九月二八日号」）

妻は、どんな思いでいるのでしょうか。

「テレビのニュースで初めて知りました。……仕事を前向きに、まじめに取り組んでいたと思います。……どういう状況でこうなってしまったのか、とりあえず会って話をするまでは、私にもよくわかりません」（同前記事より抜粋）

本書『壊れる男たち』は、まさに今が旬の新書です。

新書一点賭け 日垣 隆

（作家・ジャーナリスト）

18

壊れる男たち —セクハラはなぜ繰り返されるのか—

金子雅臣

岩波新書 777円



連日、ニュースでは痴漢やセクハラがとりあげられています。男性教諭が、生徒指導室で女子高生の身体を触った、写真撮った、下着の中に手を入れた……といった報道に接するたび、「ひどいことをするな」ではもはやなく、「なんでやねん、この流れで」と溜息のほうから先に出てきてしまします。

「毎日テレビに出ている人たち」のなかには、ハイヤーやタクシーを避けて電車に乗り続ける実直な人たちもいるのですが、彼らが恐れるのは痴漢の疑いをかけられる事態です。

セクハラや痴漢や盗撮は、男たち全員が背負わなければならない罪なのでしょうか。

私は違うと思います。

セクハラ問題のエキスパートにして東京都で労働相談に従事してきた著者は、こう言います。

《言わせてもらえば、現にセクハラをする男》と「しない男」がいる以上、そして、たとえ男性であってもセクハラを嫌悪する立場をとる者がいる以上、男全般の問題としてその責任を引き受ける